

Introduction

少し欲張りな路（みち）へ入ってみよう。地面にへばりついている道ではなく、ちょっと上から眺めることができる路だ。そのためには夢見鳥¹⁾になったほうがいいね。夢見鳥になった気分であらふらと漂ってみよう。

この路を彷徨（さまよ）うために Lua \TeX という地図を参照するが、実際は地図の隅々まで目を通すことになるだろう。なぜなら地図を参考に数学の景色を見るのに、わざわざ羅針盤まで使うからだ。スクリプト言語 Lua が羅針盤にあたる。と言っても、別途 Lua を用意するわけではない。編集は普段どおり L \TeX 2 ϵ で行い、タイプセットの種類から LuaLaTeX を選択して処理するだけだから²⁾。数学っぽく表現すると L \TeX +Lua \subset LuaL \TeX みたいな感じだろうか。以後、L \TeX 2 ϵ などは \TeX 、LuaL \TeX なども Lua \TeX （または \TeX +Lua）と略して呼ぶことにする。

欲張りな路というのは Lua \TeX が欲張りというより私が書く文書が欲張りなのである。無駄に Lua を使うからだ。本来 \TeX は組版（くみはん）のための優れたソフトウェアであるが、それを適切に使っていないだけのことである。 \TeX を数式の記述に優れたワードプロセッサとして使う人はいても、プログラミング代わりに使う人は滅多にいないだろう。ご飯を炊くための炊飯器でケーキを焼く人はいても、下着の乾燥機代わりに使う人が滅多にいないようなものだ。だけど、使えないわけじゃない。

夢見鳥になって舞い上がる前に言っておきたいことがある。それは、この路を翔んだからといって数学や Lua のスクリプトが習得できるわけではない、ということだ。数学について何かを習得しようと思ったら、それなりの数学の書物をそれなりに読まなくてはならない。スクリプトの習得にはそれなりの研究が必要だ。と、こんな風にえらそうに書き出してはいるが、私は数学の専門家ではないし \TeX や Lua の専門家でもない。そんな者がこんな物を書くのはお門違いかもしれないが、少なくとも何も知らない人より多少の経験はあると思う（思い過ごしかもしれないが）。しかし専門家でないことは事実なので、随所に専門家の目に耐えかねる部分が存在するのたしかである。記述を鵜呑みにしないほうが賢明かもしれない。

今回は正統な路をはみ出しながら進む。数学の話はまだよいとしても、Lua については単に真似

1) 夢見鳥：蝶の異名。

2) \TeX Shop の場合。

たりしないように。たばこを吸っている大人を真似たらひどい目に遭った、ということにもなりかねないからだ。じゃあ、何でこんな路に入り込もうとしているのか。それはただの好奇心に過ぎない。いろいろなことを試して、それで結局痛い目に遭うのだが、それが好きなのだ。

だから、痛い目を見ることなく数学や $\text{T}_\text{E}\text{X}$ や Lua について詳しく学びたければ、それ相応の書物を手元に置いておくことを勧める。細かいことや厳密なことや正統な作法は、是非そのような書物から学んでほしい。私は単にきっかけを与えることができれば満足なのである。



$\text{L}^{\text{A}}\text{T}_\text{E}\text{X} 2_\epsilon$ は、コンピュータにインストールして利用する。インストールについて詳しく述べることはしないが、一からインストールするとなると難しいことが多い。たとえば、書籍「 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_\text{E}\text{X} 2_\epsilon$ 美文書作成入門」に付属している DVD からインストールするのが手軽でよい。 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_\text{E}\text{X} 2_\epsilon$ は組版のためのアプリケーションなので、書籍のようなものを出版するためには大変重宝する。また、数式の処理に優れているので、数式が適切に記述できるワードプロセッサとして使われる場合もある。ただし、使い慣れるまでには少し時間がかかるかもしれない。詳しいことは、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_\text{E}\text{X} 2_\epsilon$ について書かれた書物を読んでもらうか、web サイトから情報を得るとよいだろう。

また、インターネット上には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_\text{E}\text{X} 2_\epsilon$ を体験できるサイトもあるので試してみるとよいだろう。きっと気に入る—ことを期待している。

今回は宙を舞いながらあちこちに進む。なんでこんなことしてるんだ、と思うかもしれない。だから意味のないことを楽しめる人向けの路である。それでは千鳥足で浮遊する路へ入ってみよう。